

## 第 2 章

# 半単純 Lie 代数

この章以降、 $\mathbb{K}$ -ベクトル空間  $V$  の零ベクトルを  $0 \in V$  と書き、零ベクトル空間  $\{0\}$  のことも  $0$  と表記する<sup>\*1</sup>。この章において、特に断らない限り体  $\mathbb{K}$  は代数閉体<sup>\*2</sup>で、かつ  $\text{char } \mathbb{K} = 0$  であるとする。また、Lie 代数  $\mathfrak{g}$  は常に有限次元であるとする。

### 2.1 Lie の定理・Cartan の判定条件

#### 2.1.1 Lie の定理

##### 定理 2.1.1:

$V$  を有限次元  $\mathbb{K}$ -ベクトル空間とし、 $\mathfrak{gl}(V)$  の部分 Lie 代数  $\mathfrak{g} \subset \mathfrak{gl}(V)$  が可解であるとする。  
このとき  $V \neq 0$  ならば、 $\forall x \in \mathfrak{g}$  は共通の固有ベクトルを持つ。

##### 系 2.1.2: Lie の定理

$V$  を有限次元  $\mathbb{K}$ -ベクトル空間とし、 $\mathfrak{gl}(V)$  の部分 Lie 代数  $\mathfrak{g} \subset \mathfrak{gl}(V)$  が可解であるとする。  
このとき  $\forall x \in \mathfrak{g}$  は  $V$  のある共通の旗を安定化する。 i.e.  $\forall x \in \mathfrak{g}$  の表現行列を同時に上三角行列にするような  $V$  の基底が存在する。

#### 2.1.2 Jordan-Chevalley 分解

#### 2.1.3 Cartan の判定条件

<sup>\*1</sup> 記号の濫用だが、広く普及している慣習である。

<sup>\*2</sup> つまり、定数でない任意の 1 変数多項式  $f(x) \in \mathbb{K}[x]$  に対してある  $\alpha \in \mathbb{K}$  が存在して  $f(\alpha) = 0$  を満たす。

### 定理 2.1.3: Cartan の判定条件

$V$  を有限次元  $\mathbb{K}$ -ベクトル空間とし,  $\mathfrak{gl}(V)$  の部分 Lie 代数  $\mathfrak{g} \subset \mathfrak{gl}(V)$  を与える.  
このとき以下の 2 つは同値である:

- (1)  $\mathfrak{g}$  が可解
- (2)  $\forall x \in [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}], \forall y \in \mathfrak{g}$  に対して  $\mathrm{Tr}(x \circ y) = 0$  が成り立つ

### 系 2.1.4:

Lie 代数  $\mathfrak{g}$  を与える.  
このとき  $\forall x \in [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}], \forall y \in \mathfrak{g}$  に対して  $\mathrm{Tr}(\mathrm{ad}(x) \circ \mathrm{ad}(y)) = 0$  が成り立つならば,  $\mathfrak{g}$  は可解である.

## 2.2 Killing 形式

### 2.2.1 半単純性の判定条件

#### 定義 2.2.1: Killing 形式

体  $\mathbb{K}$  上の Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の上の対称な双線型形式

$$\kappa: \mathfrak{g} \times \mathfrak{g} \longrightarrow \mathbb{K}, (x, y) \longmapsto \mathrm{Tr}(\mathrm{ad}(x) \circ \mathrm{ad}(y))$$

のことを  $\mathfrak{g}$  の **Killing 形式** (Killing form) と呼ぶ.

#### 定義 2.2.2: 双線型形式の radical

体  $\mathbb{K}$  上の Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の上の対称な双線型形式

$$\beta: \mathfrak{g} \times \mathfrak{g} \longrightarrow \mathbb{K}$$

を与える.

- $\mathfrak{g}$  の 部分ベクトル空間

$$S_\beta := \{ x \in \mathfrak{g} \mid \forall y \in \mathfrak{g}, \beta(x, y) = 0 \}$$

のことを  $\beta$  の **radical** と呼ぶ.

- $\beta$  が**非退化** (nondegenerate) であるとは,  $S_\beta = 0$  であることを言う.

### 定理 2.2.1: Lie 代数の半単純性と Killing 形式の非退化性

$\mathfrak{g}$  が半単純 Lie 代数  $\iff \mathfrak{g}$  の Killing 形式が**非退化**

## 2.2.2 単純イデアル

Lie 代数  $\mathfrak{g}$  と、そのイデアルの族  $\{i_i\}_{i \in I}$  を与える。  $\mathfrak{g}$  が  $\{i_i\}_{i \in I}$  の直和 (direct sum)<sup>\*3</sup> であるとは、部分ベクトル空間の内部直和として

$$\mathfrak{g} = \bigoplus_{i \in I} i_i$$

が成り立つことを言う。

### 定理 2.2.2: 半単純 Lie 代数の直和分解

$\mathfrak{g}$  を半単純 Lie 代数とする。このとき  $\mathfrak{g}$  の単純イデアル  $i_1, \dots, i_t$  が存在して以下を充たす：

(1)

$$\mathfrak{g} = \bigoplus_{i=1}^t i_i$$

(2)  $\mathfrak{g}$  の任意の単純イデアルは  $i_i$  のどれか 1 つと一致する。 i.e. (1) の直和分解は一意である。

(3)  $i_i$  上の Killing 形式  $\kappa_{i_i}$  は  $\kappa_{i_i \times i_i}$  に等しい。

### 系 2.2.3:

$\mathfrak{g}$  が半単純 Lie 代数ならば以下が成り立つ：

(1)  $\mathfrak{g} = [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]$

(2)  $\mathfrak{g}$  の任意のイデアルは半単純である。

(3) 任意の Lie 代数の準同型  $f: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{h}$  について、 $\text{Im}(\mathfrak{h})$  は半単純である。

(4)  $\mathfrak{g}$  の任意のイデアルは  $\mathfrak{g}$  の単純イデアルの直和である。

## 2.2.3 内部微分

## 2.2.4 抽象 Jordan 分解

## 2.3 表現の完全可約性

### 2.3.1 $\mathfrak{g}$ -加群と表現

この小節では  $\mathbb{K}$  を任意の体とする。まず、環上の加群の定義を復習する：

<sup>\*3</sup> 厳密には、命題??の意味で内部直和 (internal direct sum) と呼ぶべきだと思う。

### 公理 2.3.1: 環上の加群の公理

- $R$  を環とする. **左  $R$  加群** (left  $R$ -module) とは, 可換群  $(M, +, 0)$  と写像<sup>a</sup>

$$\cdot : R \times M \rightarrow M, (a, x) \mapsto a \cdot x$$

の組  $(M, +, \cdot)$  であって,  $\forall x, x_1, x_2 \in M, \forall a, b \in R$  に対して以下を充たすもののことを言う:

**(LM1)**  $a \cdot (b \cdot x) = (ab) \cdot x$

**(LM2)**  $(a + b) \cdot x = a \cdot x + b \cdot x$

**(LM3)**  $a \cdot (x_1 + x_2) = a \cdot x_1 + a \cdot x_2$

**(LM4)**  $1 \cdot x = x$

ただし,  $1 \in R$  は環  $R$  の乗法単位元である.

- $R$  を環とする. **右  $R$  加群** (right  $R$ -module) とは, 可換群  $(M, +, 0)$  と写像

$$\cdot : M \times R \rightarrow M, (x, a) \mapsto x \cdot a$$

の組  $(M, +, \cdot)$  であって,  $\forall x, x_1, x_2 \in M, \forall a, b \in R$  に対して以下を充たすもののことを言う:

**(RM1)**  $(x \cdot b) \cdot a = x \cdot (ba)$

**(RM2)**  $x \cdot (a + b) = x \cdot a + x \cdot b$

**(RM3)**  $(x_1 + x_2) \cdot a = x_1 \cdot a + x_2 \cdot a$

**(RM4)**  $x \cdot 1 = x$

- $R, S$  を環とする.  **$(R, S)$  両側加群**  $((R, S)$ -bimodule) とは, 可換群  $(M, +, 0)$  と写像

$$\cdot_L : R \times M \rightarrow M, (a, x) \mapsto a \cdot_L x$$

$$\cdot_R : M \times R \rightarrow M, (x, a) \mapsto x \cdot_R a$$

の組  $(M, +, \cdot_L, \cdot_R)$  であって,  $\forall x \in M, \forall a \in R, \forall b \in S$  に対して以下を充たすもののことを言う:

**(BM1)** 左スカラー乗法  $\cdot_L$  に関して  $M$  は左  $R$  加群になる

**(BM2)** 右スカラー乗法  $\cdot_R$  に関して  $M$  は右  $S$  加群になる

**(BM3)**  $(a \cdot_L x) \cdot_R b = a \cdot_L (x \cdot_R b)$

<sup>a</sup> この写像  $\cdot$  はスカラー乗法 (scalar multiplication) と呼ばれる.

$R$  が可換環の場合, **(LM1)** と **(RM1)** が同値になるので, 左  $R$  加群と右  $R$  加群の概念は同値になる. これを単に  **$R$  加群** ( $R$ -module) と呼ぶ.

$R$  が体の場合,  $R$  加群のことを  **$R$ -ベクトル空間** と呼ぶ.



以下では, なんの断りもなければ  $R$  加群と言って左  $R$  加群を意味する.

$\mathfrak{g}$  を体  $\mathbb{K}$  上の Lie 代数とする. このとき, **環上の加群の公理** を少し修正することで Lie 代数  $\mathfrak{g}$  上の加群の概念を得る:

### 公理 2.3.2: Lie 代数上の加群

$\mathfrak{g}$  を体  $\mathbb{K}$  上の Lie 代数とする.  **$\mathfrak{g}$ -加群**とは,  $\mathbb{K}$ -ベクトル空間  $(V, +, \cdot)$  と写像

$$\blacktriangleright: \mathfrak{g} \times V \longrightarrow V, (x, v) \longmapsto x \blacktriangleright v$$

の 4 つ組  $(V, +, \cdot, \blacktriangleright)$  であって,  $\forall x, x_1, x_2 \in \mathfrak{g}, \forall v, v_1, v_2 \in V, \forall \lambda, \mu \in \mathbb{K}$  に対して以下を満たすもののことを言う:

$$(M1) \quad (\lambda \cdot x_1 + \mu \cdot x_2) \blacktriangleright v = \lambda \cdot (x_1 \blacktriangleright v) + \mu \cdot (x_2 \blacktriangleright v)$$

$$(M2) \quad x \blacktriangleright (\lambda \cdot v_1 + \mu \cdot v_2) = \lambda \cdot (x \blacktriangleright v_1) + \mu \cdot (x \blacktriangleright v_2)$$

$$(M3) \quad [x, y] \blacktriangleright v = x \blacktriangleright (y \blacktriangleright v) - y \blacktriangleright (x \blacktriangleright v)$$

同値な定義として, Lie 代数の表現

$$\phi: \mathfrak{g} \longrightarrow \mathfrak{gl}(V), x \longmapsto (v \mapsto \phi(x)(v))$$

について

$$\blacktriangleright: \mathfrak{g} \times V \longrightarrow V, (x, v) \longmapsto \phi(x)(v)$$

とおくことで得られる 4 つ組  $(V, +, \cdot, \blacktriangleright)$  のことである<sup>a</sup>.

<sup>a</sup> 【例??】より  $\mathfrak{gl}(V)$  の Lie ブラケットは交換子だったので  $[x, y] \blacktriangleright - = \phi([x, y]) = [\phi(x), \phi(y)] = \phi(x) \circ \phi(y) - \phi(y) \circ \phi(x) = x \blacktriangleright (y \blacktriangleright -) - y \blacktriangleright (x \blacktriangleright -)$  となる.

!

$\mathfrak{g}$ -加群に備わっている 3 つの演算 (加法, スカラー乗法, 左作用) をいちいち全て明記するのは面倒なので  $(V, +, \cdot, \blacktriangleright)$  のことを「 **$\mathfrak{g}$ -加群  $V$** 」と略記する. この略記において, 今まで通りスカラー乗法  $\cdot$  は省略して  $\lambda v$  の様に見え, 左作用はなんの断りもなく  $x \blacktriangleright v$  の様に見え書くことにする.

全く同様に代数上の加群, 結合代数上の加群を定義することもできるが, 本章では以降  **$\mathfrak{g}$ -加群** と言ったら **Lie 代数上の加群** を指すことにする. Lie 代数の表現を考えることは  $\mathfrak{g}$ -加群を考えることと同値なのである.

### 定義 2.3.1: $\mathfrak{g}$ -加群の準同型

$\mathfrak{g}$  を Lie 代数,  $(V, +, \cdot, \triangleright_1), (W, +, \cdot, \triangleright_2)$  を  $\mathfrak{g}$ -加群とする.

- 線型写像  $f: V \rightarrow W$  が  $\mathfrak{g}$ -加群の準同型 (homomorphism of  $\mathfrak{g}$ -module) <sup>a</sup> であるとは,  $\forall x \in \mathfrak{g}, \forall v \in V$  に対して

$$f(x \triangleright_1 v) = x \triangleright_2 f(v)$$

が成り立つこと <sup>b</sup>.

- $\mathfrak{g}$ -加群の準同型  $f: V \rightarrow W$  が同型 (isomorphism) であるとは,  $f$  が ベクトル空間の同型写像 であることを言う.
- 同型な  $\mathfrak{g}$ -加群のことを, 同値な  $\mathfrak{g}$  の表現 (equivalent representation of  $\mathfrak{g}$ ) とも言う.

<sup>a</sup> 同変写像 (equivalent map) と言うこともある. 絡作用素 (intertwining operator), インタートウィナー (intertwiner) と言う場合もあるが, そこまで普及していない気がする.

<sup>b</sup> スカラー乗法についての線型性の定義を  $\triangleright$  について拡張しただけ.

同値な定義だが, 線型写像  $f: V \rightarrow W$  が  $\mathfrak{g}$ -加群の準同型であるとは, Lie 代数の表現

$$\phi_1: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V), x \mapsto (v \mapsto x \triangleright_1 v)$$

$$\phi_2: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(W), x \mapsto (v \mapsto x \triangleright_2 v)$$

に関して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f \circ \phi_1(x) = \phi_2(x) \circ f$$

が成り立つことを言う.

### 定義 2.3.2: 部分 $\mathfrak{g}$ -加群

$\mathfrak{g}$ -加群  $V$  を与える. 部分集合  $W \subset V$  が部分  $\mathfrak{g}$ -加群であるとは,  $W$  が和, スカラー乗法,  $\mathfrak{g}$  の左作用の全てについて閉じていること. i.e.  $\forall w, w_1, w_2 \in W, \forall \lambda \in \mathbb{K}, \forall x \in \mathfrak{g}$  に対して

$$w_1 + w_2 \in W$$

$$\lambda w \in W$$

$$x \triangleright w \in W$$

が成り立つことを言う.

同値な定義として, 以下の2つの条件が満たされることを言う:

(sub-M1)  $W$  が  $V$  の部分ベクトル空間

(sub-M2) Lie 代数の表現

$$\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V), x \mapsto (v \mapsto x \triangleright v)$$

に関して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, \phi(x)(W) \subset W$$

が成り立つ. i.e.  $\forall x \in \mathfrak{g}$  に対して  $W$  は  $\phi(x)$ -不変である.

### 【例 2.3.1】 $\mathfrak{g}$ -加群の準同型の核と像

$\mathfrak{g}$ -加群  $V, W$  とその間の  $\mathfrak{g}$ -加群の準同型  $f: V \longrightarrow W$  を与える. このとき

$$\begin{aligned} v \in \text{Ker } f &\implies \forall x \in \mathfrak{g}, f(x \blacktriangleright v) = x \blacktriangleright f(v) = x \blacktriangleright 0 = 0 \iff \forall x \in \mathfrak{g}, x \blacktriangleright v \in \text{Ker } f, \\ w \in \text{Im } f &\iff \exists v \in V, w = f(v) \implies \forall x \in \mathfrak{g}, x \blacktriangleright w = x \blacktriangleright f(v) = f(x \blacktriangleright v) \\ &\iff \forall x \in \mathfrak{g}, x \blacktriangleright w \in \text{Im } f \end{aligned}$$

が言えるので  $\text{Ker } f, \text{Im } f$  はそれぞれ  $V, W$  の部分  $\mathfrak{g}$ -加群である.

## 2.3.2 $\mathfrak{g}$ -加群の直和と既約性

この小節でも  $\mathbb{K}$  を任意の体とする.

### 定義 2.3.3: $\mathfrak{g}$ -加群の直和

$\mathfrak{g}$ -加群の族  $\{(V_i, +, \cdot, \blacktriangleright_i)\}_{i \in I}$  を与える. このとき

- 直和ベクトル空間  $\bigoplus_{i \in I} V_i$
- $\bigoplus_{i \in I} V_i$  への  $\mathfrak{g}$  の左作用

$$\blacktriangleright: \mathfrak{g} \times \bigoplus_{i \in I} V_i \longrightarrow \bigoplus_{i \in I} V_i, (x, (v_i)_{i \in I}) \longmapsto (x \blacktriangleright_i v_i)_{i \in I}$$

の組として得られる  $\mathfrak{g}$ -加群  $(\bigoplus_{i \in I} V_i, +, \cdot, \blacktriangleright)$  を  $\mathfrak{g}$ -加群の直和 (direct sum) と呼び<sup>a</sup>,  $\bigoplus_{i \in I} V_i$  と略記する.

<sup>a</sup> 系??の注と同様に, この定義は厳密には外部直和 (external direct sum) と呼ぶべきだと思う.

### 定義 2.3.4: Lie 代数の表現の既約性

- $\mathfrak{g}$ -加群  $V$  が既約 (irreducible)<sup>a</sup> であるとは,  $V$  の部分  $\mathfrak{g}$ -加群が  $0, V$  のちょうど2つ<sup>b</sup>だけであることを言う.
- $\mathfrak{g}$ -加群  $V$  が完全可約 (completely reducible) であるとは,  $V$  が既約な部分  $\mathfrak{g}$ -加群の直和<sup>c</sup>であることを言う.

<sup>a</sup> i.e. Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の表現  $(\phi, V)$  が既約表現 (irreducible representation; irrep) だ, と言っても良い.

<sup>b</sup> つまり, 零ベクトル空間  $0$  は既約な  $\mathfrak{g}$ -加群とは呼ばない.

<sup>c</sup> こちらの場合, 厳密には内部直和 (internal direct sum) と呼ぶべきだと思う.

次の補題は証明が少し厄介である：

### 補題 2.3.1: 完全可約の全射

**g-加群の準同型**  $p: V \longrightarrow W$  を与える．このとき  $p$  が全射かつ  $V$  が**完全可約**ならば，**g-加群の短完全列**

$$0 \longrightarrow \text{Ker } p \hookrightarrow V \xrightarrow{p} W \longrightarrow 0$$

は分裂する．

**証明**  $V$  が完全可約という仮定から，**既約な部分 g-加群**の族  $\{V_i\}_{i \in I}$  が存在して，内部直和の意味で

$$V = \bigoplus_{i \in I} V_i$$

と書ける．ここで  $S$  を以下の条件を充たす組  $(J, V_J)$  全体の集合とする：

- $J \subset I, V_J = \bigoplus_{j \in J} V_j \subset V$
- $\text{Ker } p \cap V_J = 0$

$S$  の上の 2 項関係を

$$(J, V_J) \leq (K, V_K) \stackrel{\text{def}}{\iff} J \subset K$$

と定義すると組  $(S, \leq)$  は順序集合になる．また  $S' = \{(J_a, V_{J_a})\}_{a \in A}$  を  $S$  の任意の全順序部分集合とすると  $(\bigcup_{a \in A} J_a, V_{\bigcup_{a \in A} J_a}) \in S$  であり<sup>\*4</sup>，これが  $S'$  の上界を与える．i.e.  $S$  は帰納的順序集合である．したがって Zorn の補題を使うことができ， $S$  は極大元  $(J_0, V_{J_0}) \in S$  を持つ．

次に  $V = \text{Ker } p \oplus V_{J_0}$  を示す． $S$  の定義から  $\text{Ker } p \cap V_{J_0} = 0$  なので，命題??より  $V = \text{Ker } p + V_{J_0}$  を示せば良い． $V \neq \text{Ker } p + V_{J_0}$  を仮定すると，ある  $k \in I \setminus J_0$  が存在して  $V_k \not\subset \text{Ker } p + V_{J_0}$  を充たす． $V_k$  は既約なので  $V_k \cap (\text{Ker } p + V_{J_0}) = 0$  が成り立つが，このことは  $(J_0, V_{J_0})$  の極大性に矛盾．よって背理法から  $V = \text{Ker } p + V_{J_0}$  が言えた．

以上より  $W \cong V / \text{Ker } p \cong V_{J_0}$  が言える．このとき包含準同型  $i: V_{J_0} \hookrightarrow V$  が  $p \circ i = \text{id}_{V_{J_0}}$  を充たすので証明が完了した． ■

### 命題 2.3.1: 完全可約性の特徴付け

以下の 2 つは同値である：

- (1) **g-加群**  $V$  が**完全可約**
- (2)  $V$  の任意の**部分 g-加群**  $W \subset V$  に対して，**部分 g-加群**  $W^c \subset V$  <sup>a</sup>が存在して  $V \cong W \oplus W^c$  を充たす．

<sup>a</sup>  $W$  の**補表現** (complement representation) と言う．

<sup>\*4</sup>  $V_{\bigcup_{a \in A} J_a} = \bigoplus_{j \in \bigcup_{a \in A} J_a} V_j = \bigcup_{a \in A} V_{J_a}$  なので， $\cap$  の分配律から  $\text{Ker } p \cap V_{\bigcup_{a \in A} J_a} = \text{Ker } p \cap \bigcup_{a \in A} V_{J_a} = \bigcup_{a \in A} (\text{Ker } p \cap V_{J_a}) = 0$  が言える．



証明 (1)  $\implies$  (2)  $V$  が既約な部分  $\mathfrak{g}$ -加群の族  $\{V_i\}_{i \in I}$  によって

$$V = \bigoplus_{i \in I} V_i$$

と書けるとする.  $V$  の任意の部分  $\mathfrak{g}$ -加群  $W \subset V$  を 1 つ固定する. このとき標準的射影  $p: V \rightarrow V/W$  は全射な  $\mathfrak{g}$ -加群の準同型なので, 補題 2.3.1 から  $\mathfrak{g}$ -加群の短完全列

$$0 \longrightarrow \text{Ker } p \cong W \hookrightarrow V \xrightarrow{p} V/W \longrightarrow 0$$

が分裂する. よって系??から

$$V \cong W \oplus (V/W)$$

が言えた.

(1)  $\Leftarrow$  (2)

$V$  の既約な部分  $\mathfrak{g}$ -加群全体の集合を  $\mathcal{V}$  と書く.  $\mathcal{S}$  を以下の条件を満たす組  $(I, V_I)$  全体の集合とする:

- $I \subset \mathcal{V}$
- 内部直和の意味で  $V_I = \bigoplus_{i \in I} V_i \subset V$

$\mathcal{S}$  上の 2 項関係を

$$(I, V_I) \leq (J, V_J) \stackrel{\text{def}}{\iff} I \subset J$$

と定義すると組  $(\mathcal{S}, \leq)$  は順序集合になる.  $V$  の 0 でない部分  $\mathfrak{g}$ -加群のうち極小のものを  $V_1$  とすると, 定義から  $V_1 \in \mathcal{V}$  なので  $(\{V_1\}, V_{V_1}) \in \mathcal{S}$  となり  $\mathcal{S}$  は空でない. また  $\mathcal{S}' = \{(J_a, V_{J_a})\}_{a \in A}$  を  $\mathcal{S}$  の任意の全順序部分集合とすると  $(\bigcup_{a \in A} J_a, V_{\bigcup_{a \in A} J_a}) \in \mathcal{S}$  であり, これが  $\mathcal{S}'$  の上界を与える. i.e.  $\mathcal{S}$  は帰納的順序集合である. したがって Zorn の補題を使うことができ,  $\mathcal{S}$  は極大元  $(I_0, V_{I_0}) \in \mathcal{S}$  を持つ. このとき  $V = V_{I_0}$  であることを背理法により示そう.

$V \neq V_{I_0}$  を仮定する. このとき (2) より  $V$  の 0 でない部分  $\mathfrak{g}$ -加群  $V_{I_0}^c$  が存在して  $V \cong V_{I_0} \oplus V_{I_0}^c$  を満たす. このとき  $V_{I_0}^c$  に含まれる 0 でない極小の部分  $\mathfrak{g}$ -加群  $W$  をとることができるが, 定義からこの  $W$  は既約である. よって

$$W \oplus V_{I_0} \subset V$$

もまた既約部分  $\mathfrak{g}$ -加群の直和となり,  $V_{I_0}$  の極大性に矛盾する. ■

### 補題 2.3.2: Schur の補題

任意の体<sup>a</sup>  $\mathbb{K}$  上の  $\mathfrak{g}$ -加群  $V, W$ , および 0 でない  $\mathfrak{g}$ -加群の準同型  $f: V \rightarrow W$  を与える. このとき以下が成り立つ:

- (1)  $V$  が既約ならば  $f$  は単射
- (2)  $W$  が既約ならば  $f$  は全射

---

<sup>a</sup> 代数閉体でなくても良い

**証明** (1) 【例 2.3.1】より  $\text{Ker } f$  は  $V$  の部分  $\mathfrak{g}$ -加群だが,  $V$  が既約なので  $\text{Ker } f = 0$ ,  $V$  のどちらかである. 仮定より  $f$  は 0 でないので  $\text{Ker } f = 0$ , i.e.  $f$  は単射である.

(2) 【例 2.3.1】より  $\text{Im } f$  は  $W$  の部分  $\mathfrak{g}$ -加群だが,  $W$  が既約なので  $\text{Im } f = 0$ ,  $W$  のどちらかである. 仮定より  $f$  は 0 でないので  $\text{Im } f = W$ , i.e.  $f$  は全射である. ■

### 系 2.3.1: 代数閉体上の Schur の補題

代数閉体  $\mathbb{K}$  上の有限次元  $\mathfrak{g}$ -加群  $V$  を与える. このとき  $V$  が既約ならば, 任意の  $\mathfrak{g}$ -加群の自己準同型  $\phi \in \text{End } V$  はある  $\lambda \in \mathbb{K}$  を使って  $\phi = \lambda \text{id}_V$  (i.e. スカラー倍) と書ける.

**証明** 仮定より  $V$  が既約なので, 補題 2.3.2-(1), (2) より任意の  $\mathfrak{g}$ -加群の自己準同型  $\phi: V \rightarrow V$  は  $\mathfrak{g}$ -加群の同型か 0 のどちらかである. ここで  $\lambda \in \mathbb{K}$  を  $\phi$  の固有値とする.  $\mathbb{K}$  が代数閉体なので  $\lambda$  は確かに存在する. このとき写像  $\phi - \lambda \text{id}_V: V \rightarrow V$  もまた  $\mathfrak{g}$ -加群の自己準同型となるが, 固有値の定義から  $\det(\phi - \lambda \text{id}_V) = 0$  なので同型写像ではあり得ない. よって  $\phi - \lambda \text{id}_V = 0 \iff \phi = \lambda \text{id}_V$  である. ■

### 系 2.3.2: 可換な Lie 代数の有限次元既約表現

代数閉体上の Lie 代数  $\mathfrak{g}$  が可換ならば,  $\mathfrak{g}$  の任意の有限次元既約表現は 1 次元である.

**証明**  $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$  を  $\mathfrak{g}$  の有限次元既約表現とする. このとき  $\mathfrak{g}$  が可換であることから  $\forall x, y \in \mathfrak{g}, \forall v \in V$  に対して

$$\begin{aligned} \phi(x)(y \triangleright v) &= \phi(x) \circ \phi(y)(v) \\ &= [\phi(x), \phi(y)](v) + \phi(y) \circ \phi(x)(v) \\ &= \phi([x, y])(v) + \phi(y) \circ \phi(x)(v) \\ &= \phi(0)(v) + \phi(y) \circ \phi(x)(v) \\ &= \phi(y) \circ \phi(x)(v) \\ &= y \triangleright (\phi(x)(v)) \end{aligned}$$

が言える. i.e.  $\forall x \in \mathfrak{g}$  に対して  $\phi(x): V \rightarrow V$  は  $\mathfrak{g}$ -加群の準同型である. よって Schur の補題から  $\phi(x)$  がスカラー倍だとわかる. 故に  $V$  の任意の 1 次元部分ベクトル空間は自動的に部分  $\mathfrak{g}$ -加群になる. 然るに  $V$  は仮定より既約だから  $V$  の部分  $\mathfrak{g}$ -加群は 0,  $V$  しかあり得ない. さらに  $V \neq 0$  なので  $\dim V = 1$  でなくてはならない. ■

## 2.3.3 $\mathfrak{g}$ -加群の Hom とテンソル積

この小節でも  $\mathbb{K}$  を任意の体とする.

### 定義 2.3.5: $\mathfrak{g}$ -加群のテンソル積

$(V_1, +, \cdot, \triangleright_1), (V_2, +, \cdot, \triangleright_2)$  を有限次元  $\mathfrak{g}$ -加群 とする. このとき

- $\mathbb{K}$ -ベクトル空間のテンソル積  $V_1 \otimes V_2$
- $V_1 \otimes V_2$  への  $\mathfrak{g}$  の左作用<sup>a</sup>

$$\triangleright: \mathfrak{g} \times (V_1 \otimes V_2) \longrightarrow V_1 \otimes V_2, (x, v_1 \otimes v_2) \longmapsto (x \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (x \triangleright_2 v_2)$$

の組として得られる  $\mathfrak{g}$ -加群  $(V_1 \otimes V_2, +, \cdot, \triangleright)$  を  $\mathfrak{g}$ -加群のテンソル積 (tensor product) と呼び,  $V_1 \otimes V_2$  と略記する.

<sup>a</sup> 正確には, これの右辺を線型に拡張したもの

実際  $V_1 \otimes V_2$  が  $\mathfrak{g}$ -加群になっていることを確認しておこう:

$$\begin{aligned} [x, y] \triangleright (v_1 \otimes v_2) &= ([x, y] \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes ([x, y] \triangleright_2 v_2) \\ &= (x \triangleright_1 y \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 - (y \triangleright_1 x \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 \\ &\quad + v_1 \otimes (x \triangleright_2 y \triangleright_2 v_2) - v_1 \otimes (y \triangleright_2 x \triangleright_2 v_2) \\ &= ((x \triangleright_1 y \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (x \triangleright_2 y \triangleright_2 v_2)) \\ &\quad - ((y \triangleright_1 x \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (y \triangleright_2 x \triangleright_2 v_2)), \\ x \triangleright y \triangleright (v_1 \otimes v_2) - y \triangleright x \triangleright (v_1 \otimes v_2) &= x \triangleright ((y \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (y \triangleright_2 v_2)) \\ &\quad - y \triangleright ((x \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (x \triangleright_2 v_2)) \\ &= ((x \triangleright_1 y \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (x \triangleright_2 y \triangleright_2 v_2)) \\ &\quad - ((y \triangleright_1 x \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (y \triangleright_2 x \triangleright_2 v_2)) \end{aligned}$$

なので

$$[x, y] \triangleright (v_1 \otimes v_2) = x \triangleright y \triangleright (v_1 \otimes v_2) - y \triangleright x \triangleright (v_1 \otimes v_2)$$

がわかった.

### 定義 2.3.6: $\mathfrak{g}$ -加群の双対

$(V, +, \cdot, \triangleright)$  を有限次元  $\mathfrak{g}$ -加群 とする. このとき

- 双対ベクトル空間  $V^* = \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, \mathbb{K})$
- $V^*$  への  $\mathfrak{g}$  の左作用

$$\triangleright: \mathfrak{g} \times V^* \longrightarrow V^*, (x, f) \longmapsto (v \mapsto -f(x \triangleright v))$$

の組として得られる  $\mathfrak{g}$ -加群  $(V^*, +, \cdot, \triangleright)$  を  $\mathfrak{g}$ -加群の双対 (dual)<sup>a</sup> と呼び,  $V^*$  と略記する.

<sup>a</sup> 反傾 (contragradient) と呼ぶ場合もあるようだが, 現在はあまり使われていないような気がする.

実際  $V^*$  が  $\mathfrak{g}$ -加群になっていることを確認しておこう：

$$\begin{aligned}
 ([x, y] \triangleright f)(v) &= -f([x, y] \triangleright f)(v) \\
 &= -f(x \triangleright y \triangleright v - y \triangleright x \triangleright v) \\
 &= -f(x \triangleright y \triangleright v) + f(y \triangleright x \triangleright v) \\
 &= (x \triangleright f)(y \triangleright v) - (y \triangleright f)(x \triangleright v) \\
 &= -(y \triangleright (x \triangleright f))(v) + (x \triangleright (y \triangleright f))(v) \\
 &= (x \triangleright y \triangleright f)(v) - (y \triangleright x \triangleright f)(v)
 \end{aligned}$$

なので

$$[x, y] \triangleright f = x \triangleright y \triangleright f - y \triangleright x \triangleright f$$

がわかった。

ここで、 $\mathbb{K}$ -ベクトル空間の自然な同型（命題??）

$$V^* \otimes W \cong \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$$

の具体形が

$$\alpha: f \otimes w \mapsto (v \mapsto f(v) \cdot w) \quad (2.3.1)$$

となっていたことを思い出そう。このことから、 $\mathbb{K}$ -ベクトル空間  $\text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$  の上の  $\mathfrak{g}$  の左作用を

$$x \triangleright (f \otimes w) = -f(x \triangleright -) \otimes w + f \otimes (x \triangleright w)$$

に着想を得て

$$(x \triangleright F)(v) = -F(x \triangleright v) + x \triangleright F(v) \quad (\forall F \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W))$$

と定義しようと思うのが自然である。というのも、こう定義することで  $\mathbb{K}$ -ベクトル空間の同型写像 (2.3.1) が

$$\begin{aligned}
 \alpha(x \triangleright (f \otimes w))(v) &= -\alpha(f(x \triangleright -) \otimes w)(v) + \alpha(f \otimes (x \triangleright w))(v) \\
 &= -f(x \triangleright v) \cdot w + f(v) \cdot (x \triangleright w) \\
 &= -f(x \triangleright v) \cdot w + x \triangleright (f(v) \cdot w) \\
 &= (x \triangleright \alpha(f \otimes w))(v)
 \end{aligned}$$

となって  **$\mathfrak{g}$ -加群の同型写像**になる！

### 定義 2.3.7: $\mathfrak{g}$ -加群の $\text{Hom}$

$(V, +, \cdot, \triangleright_1), (W, +, \cdot, \triangleright_2)$  を有限次元 **$\mathfrak{g}$ -加群**とする。このとき

- $\mathbb{K}$ -ベクトル空間  $\text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$ <sup>a</sup>
- $\text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$  への  $\mathfrak{g}$  の左作用

$$\triangleright: \mathfrak{g} \times \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W), F \longmapsto (v \mapsto -F(x \triangleright_1 v) + x \triangleright_2 F(v))$$

の組として得られる  $\mathfrak{g}$ -加群  $(\text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W), +, \cdot, \triangleright)$  を  **$\text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$**  と略記する。

<sup>a</sup>  $V$  から  $W$  への  **$\mathfrak{g}$ -加群の準同型**全体の集合ではない。

### 2.3.4 Casimir 演算子

この小節では  $\mathbb{K}$  は標数 0 の体とする.

#### 定義 2.3.8: 忠実な表現

Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の表現  $\rho: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$  が**忠実** (faithful)<sup>a</sup> であるとは,  $\rho$  が単射であることを言う.

<sup>a</sup> 群作用の文脈では**効果的な作用** (effective action) と呼ぶ.

#### 補題 2.3.3:

- 半単純 Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の**忠実な有限次元表現**  $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$
- $\mathfrak{g}$  上の対称な双線型形式

$$\beta: \mathfrak{g} \times \mathfrak{g} \rightarrow \mathbb{K}, (x, y) \mapsto \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(y))$$

を与える.  $\beta$  の **radical** を

$$S_\beta := \{ x \in \mathfrak{g} \mid \forall y \in \mathfrak{g}, \beta(x, y) = 0 \}$$

とおく. このとき以下が成り立つ:

- (1)  $S_\beta$  は  $\mathfrak{g}$  のイデアルである.
- (2)  $S_\beta = 0$ , i.e.  $\beta$  は**非退化**である.

**証明** (1)  $\text{Tr}$  の循環性から

$$\begin{aligned} \beta(x, [y, z]) &= \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi([y, z])) \\ &= \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(y) \circ \phi(z)) - \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(z) \circ \phi(y)) \\ &= \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(y) \circ \phi(z)) - \text{Tr}(\phi(y) \circ \phi(x) \circ \phi(z)) \\ &= \text{Tr}(\phi([x, y]) \circ \phi(z)) \\ &= \beta([x, y], z) \end{aligned}$$

が成り立つので,  $\forall x \in \mathfrak{g}, \forall y \in S_\beta$  に対して

$$\forall z \in \mathfrak{g}, \beta([x, y], z) = -\beta(y, [x, z]) = 0$$

が成り立つ. i.e.  $[x, y] \in S_\beta$  が言えた.

(2)  $S_\beta$  の定義から  $[\phi(x), \phi(y)]$  の形をした  $[\phi(S_\beta), \phi(S_\beta)]$  の任意の元および  $\forall \phi(z) \in \phi(S_\beta)$  に対して

$$\begin{aligned} \text{Tr}([\phi(x), \phi(y)] \circ \phi(z)) &= \text{Tr}(\phi([x, y]) \circ \phi(z)) \\ &= \beta([x, y], z) \\ &= 0 \end{aligned}$$

が成り立つので, 定理 2.1.3 より  $\phi(S_\beta)$  は可解である.  $\phi$  は忠実なので  $\text{Ker } \phi = 0$  であり, 準同型定理から  $\phi(S_\beta) \cong S_\beta / \text{Ker } \phi = S_\beta$  が言える. 従って (1) も併せると  $S_\beta$  は  $\mathfrak{g}$  の可解イデアルである. 仮定より  $\mathfrak{g}$  は半単純だったから, 半単純 Lie 代数の定義から  $S_\beta = 0$  が言える.

#### 補題 2.3.4:

- 半単純 Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の基底  $\{e_\mu\}$
- 対称かつ非退化な双線型形式  $\beta \in L(\mathfrak{g}, \mathfrak{g}; \mathbb{K})$  であって  $\forall x, y, z \in \mathfrak{g}$  に対して

$$\beta(x, [y, z]) = \beta([x, y], z)$$

を満たすもの

を与える. このとき以下が成り立つ:

- (1)  $\mathfrak{g}$  の基底  $\{e^\mu\}$  であって<sup>a</sup>,  $\forall(\mu, \nu) \in \{1, \dots, \dim \mathfrak{g}\}^2$  に対して

$$\beta(e_\mu, e^\nu) = \delta_\mu^\nu$$

を満たすものが一意的に存在する.

- (2)  $\forall x \in \mathfrak{g}$  を一つ固定する. このとき  $\text{ad}(x): \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$  の基底  $\{e_\mu\}$  による表現行列  $[a_\mu^\nu]_{1 \leq \mu, \nu \leq \dim \mathfrak{g}}$  と, (1) の基底  $\{e^\mu\}$  による表現行列  $[b^\mu_\nu]_{1 \leq \mu, \nu \leq \dim \mathfrak{g}}$  について

$$a_\mu^\nu = -b^\nu_\mu$$

が成り立つ.

<sup>a</sup>  $\mathfrak{g}^*$  の元ではないが, Einstein の規約との便宜上添字を上付きにする.

**証明** (1)  $\beta_{\mu\nu} := \beta(e_\mu, e_\nu)$  とおく. このとき  $x = x^\mu e_\mu \in \mathfrak{g}$  に対して

$$\begin{aligned} \forall y = y^\nu e_\nu \in \mathfrak{g}, \beta(x, y) = 0 &\iff \forall \begin{bmatrix} y^1 \\ \vdots \\ y^{\dim \mathfrak{g}} \end{bmatrix} \in \mathbb{K}^{\dim \mathfrak{g}}, \beta_{\mu\nu} x^\mu y^\nu = 0 \\ &\iff 1 \leq \forall \nu \leq \dim \mathfrak{g}, \beta_{\nu\mu} x^\mu = 0 \\ &\iff \begin{bmatrix} x^1 \\ \vdots \\ x^{\dim \mathfrak{g}} \end{bmatrix} \in \text{Ker}[\beta_{\mu\nu}] \subset \mathbb{K}^{\dim \mathfrak{g}} \end{aligned}$$

が言える. ただし 2 つ目の同値変形で  $\beta$  が対称であることを使った. したがって  $\beta$  が非退化であることは  $\text{Ker}[\beta_{\mu\nu}] = 0$  と同値であり, このことはさらに補題??-(3) より  $\det[\beta_{\mu\nu}] \neq 0$  と同値である<sup>\*5</sup>. よって  $[\beta_{\mu\nu}]$  の逆行列  $[\alpha^{\mu\nu}]$  が一意的に存在するので,  $e^\mu := e_\nu \alpha^{\mu\nu}$  と定めると,

$$\beta(e_\mu, e^\nu) = \alpha^{\nu\rho} \beta_{\mu\rho} = \delta_\mu^\nu$$

が成り立つ.

<sup>\*5</sup> Cramer の公式は任意の体  $\mathbb{K}$  上で成り立つ.

(2)  $\text{ad}(x)(e_\mu) =: a_\mu^\nu e_\nu$ ,  $\text{ad}(e^\mu) =: b^\mu_\nu e^\nu$  とおくと,

$$\begin{aligned} a_\mu^\nu &= a_\mu^\rho \delta_\rho^\nu \\ &= a_\mu^\rho \beta(e_\rho, e^\nu) \\ &= \beta(\text{ad}(x)(e_\mu), e^\nu) \\ &= \beta(-[e_\mu, x], e^\nu) \\ &= \beta(e_\mu, -\text{ad}(x)e^\nu) \\ &= -b^\nu_\rho \beta(e_\mu, e^\rho) \\ &= -b^\nu_\mu \end{aligned}$$

■

### 定義 2.3.9: 忠実な表現の Casimir 演算子

- 半単純 Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の有限次元表現  $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$
- 半単純 Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の基底  $\{e_\mu\}$
- 対称かつ非退化な双線型形式  $\beta \in L(\mathfrak{g}, \mathfrak{g}; \mathbb{K})$  であって  $\forall x, y, z \in \mathfrak{g}$  に対して

$$\beta(x, [y, z]) = \beta([x, y], z)$$

を満たすもの

を与える. 与えられた  $\mathfrak{g}$  の基底  $\{e_\mu\}$  から補題 2.3.4 により構成した  $\mathfrak{g}$  の基底  $\{e^\mu\}$  をとる. このとき

- $\mathbb{K}$ -線型変換

$$c_\phi(\beta): V \rightarrow V, v \mapsto \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(e^\mu)(v)$$

を  $\beta, \phi$  の前 Casimir 演算子と呼ぶ.

- $\phi$  が忠実な表現で, かつ

$$\beta(x, y) := \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(y))$$

であるとき<sup>a</sup>,  $\beta, \phi$  の前 Casimir 演算子のことを  $\phi$  の Casimir 演算子 (Casimir operator of  $\phi$ ) と呼んで  $c_\phi$  と略記する.

<sup>a</sup> 補題 2.3.3 よりこの  $\beta$  は非退化である

### 命題 2.3.2: Casimir 演算子の性質

- 半単純 Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の有限次元表現  $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$
- 半単純 Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の基底  $\{e_\mu\}$
- 対称かつ非退化な双線型形式  $\beta \in L(\mathfrak{g}, \mathfrak{g}; \mathbb{K})$  であって  $\forall x, y, z \in \mathfrak{g}$  に対して

$$\beta(x, [y, z]) = \beta([x, y], z)$$

を満たすもの

を与える. 与えられた  $\mathfrak{g}$  の基底  $\{e_\mu\}$  から補題 2.3.4 により構成した  $\mathfrak{g}$  の基底  $\{e^\mu\}$  をとる.

- (1) 前 Casimir 演算子  $c_\phi(\beta) \in \text{End}(V)$  は,  $\forall x \in \mathfrak{g}$  に対して

$$[\phi(x), c_\phi(\beta)] = 0$$

を充たす. 従って  $c_\phi(\beta)$  は  $\mathfrak{g}$ -加群の準同型である.

- (2)  $\phi$  が忠実な表現ならば, Casimir 演算子  $c_\phi \in \text{End } V$  について

$$\text{Tr } c_\phi = \dim \mathfrak{g}$$

が成り立つ.

- (3)  $\mathbb{K}$  が代数閉体でかつ  $\phi$  が忠実な表現でかつ  $\phi$  が既約表現ならば, Casimir 演算子  $c_\phi \in \text{End } V$  は  $\mathfrak{g}$  の基底の取り方によらずに

$$c_\phi = \frac{\dim \mathfrak{g}}{\dim V} \text{id}_V$$

と書ける.

**証明** (1)  $\forall x, y, z \in \text{End}(V)$  に対して

$$[x, y \circ z] = [x, y] \circ z + y \circ [x, z]$$

が成り立つことと補題 2.3.4-(2) より,

$$\begin{aligned} [\phi(x), c_\phi(\beta)] &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} [\phi(x), \phi(e_\mu)] \circ \phi(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ [\phi(x), \phi(e^\mu)] \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \text{ad}(\phi(x))(\phi(e_\mu)) \circ \phi(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \text{ad}(\phi(x))(\phi(e^\mu)) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(\text{ad}(x)(e_\mu)) \circ \phi(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(\text{ad}(x)(e^\mu)) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} a_\mu{}^\nu \phi(e_\nu) \circ \phi(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} b^\mu{}_\nu \phi(e_\mu) \circ \phi(e^\nu) \\ &= 0 \end{aligned}$$

が言えた.

- (2) 補題 2.3.4-(1) より

$$\begin{aligned} \text{Tr } c_\phi &= \sum_{\mu}^{\dim \mathfrak{g}} \text{Tr}(\phi(e_\mu) \circ \phi(e^\mu)) \\ &= \sum_{\mu}^{\dim \mathfrak{g}} \beta(e_\mu, e^\mu) \\ &= \dim \mathfrak{g} \end{aligned}$$



(3)  $\mathbb{K}$  が代数閉体でかつ  $\phi$  が既約なので, (1), (2) と代数閉体上の Schur の補題から  $c_\phi: V \rightarrow V$  は  $(\dim \mathfrak{g} / \dim V) \text{id}_V$  に等しい. ■

$\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$  が忠実でない場合は次のように考える: まず,  $\mathfrak{g}$  が半単純なので,  $\text{Ker } \phi$  ( $\mathfrak{g}$  のイデアルである) は系??から  $\mathfrak{g}$  の単純イデアルの直和である. 定理 2.2.2 を使って  $\mathfrak{g}^\perp$  を  $\mathfrak{g} =: \text{Ker } \phi \oplus \mathfrak{g}^\perp$  で定義すると,  $\mathfrak{g}^\perp \cong \mathfrak{g} / \text{Ker } \phi$  なので, 制限

$$\phi|_{\mathfrak{g}^\perp}: \mathfrak{g}^\perp \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$$

は忠実な表現になる. そして  $\mathfrak{g}^\perp$  の基底に対して定義 2.3.9 を適用するのである.

### 2.3.5 Weyl の定理

この小節では  $\mathbb{K}$  を標数 0 の体とする. [?, 第 7 章, p.80-86] に倣って Weyl の定理を証明する.

#### 補題 2.3.5:

$\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$  を半単純 Lie 代数の有限次元表現とする. このとき

$$\phi(\mathfrak{g}) \subset \mathfrak{sl}(V)$$

が成り立つ. 特に,  $\dim V = 1$  ならば  $\phi$  は零写像である<sup>a</sup>

<sup>a</sup> これを自明な表現 (trivial representation) と言う.

**証明** 【例??】 より,  $\mathfrak{sl}(V)$  の基底は行列単位  $e_{ij}$  を使って

$$\{e_{ij} - e_{ji} \mid 1 \leq i \neq j \leq \dim V\} \cup \{e_{ii} - e_{i+1,i+1} \mid 1 \leq i \leq \dim V - 1\} = \{e_i, \{e_j\}\}$$

と書けた. よって  $\mathfrak{sl}(V) = [\mathfrak{gl}(V), \mathfrak{gl}(V)]$  である. 一方で  $\mathfrak{g}$  が半単純なので系 2.2.3-(1) より  $\mathfrak{g} = [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]$  であるから,

$$\phi(\mathfrak{g}) = \phi([\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]) = [\phi(\mathfrak{g}), \phi(\mathfrak{g})] \subset [\mathfrak{gl}(V), \mathfrak{gl}(V)] = \mathfrak{sl}(V)$$

が言えた. 特に  $\dim V = 0$  ならば  $\dim \mathfrak{sl}(V) = 1^2 - 1 = 0$  なので,  $\text{Im } \phi = 0$  である. ■

#### 補題 2.3.6: Whitehead の補題

半単純 Lie 代数の有限次元表現  $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$  を与える.  
このとき

$$\forall x, y \in \mathfrak{g}, f([x, y]) = \phi(x) \circ f(y) - \phi(y) \circ f(x) \quad (2.3.2)$$

を満たす任意の  $\mathbb{K}$ -線型写像  $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, V)$  に対して, ある  $v \in V$  が存在して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = \phi(x)(v)$$

が成り立つ.

**証明 case1:  $\phi$  が既約かつ忠実な場合**

(2.3.2) を充たす任意の  $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, V)$  を 1 つとる.  $\mathfrak{g}$  の基底  $\{e_\mu\}$  を 1 つ固定し,

$$\beta: \mathfrak{g} \times \mathfrak{g} \longrightarrow \mathbb{K}, (x, y) \longmapsto \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(y))$$

を用いて補題 2.3.4-(1) の方法で対応する  $\mathfrak{g}$  の基底  $\{e^\mu\}$  を作る. このとき

$$v := \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ f(e^\mu) \in V$$

とおくと,  $\forall x \in \mathfrak{g}$  に対して補題 2.3.4 と同じ記号の下で

$$\begin{aligned} \phi(x)(v) &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(x) \circ \phi(e_\mu) \circ f(e^\mu) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} [\phi(x), \phi(e_\mu)] \circ f(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\mu) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(\text{ad}(x)(e_\mu)) \circ f(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\mu) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} a_\mu^\nu \phi(e_\nu) \circ f(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\mu) \\ c_\phi \circ f(x) &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(e^\nu) \circ f(x) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ f([e^\nu, x]) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\nu) \\ &= - \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ f(\text{ad}(x)(e^\nu)) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\nu) \\ &= - \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} b_\mu^\nu \phi(e_\mu) \circ f(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\nu) \end{aligned}$$

と計算できるので, 補題 2.3.4-(2) から

$$\phi(x)(v) = c_\phi \circ f(x)$$

が言えた. 仮定より  $\mathfrak{g}$ -加群  $V$  は既約なので, Schur の補題-(1), (2) から  $\mathfrak{g}$ -加群の準同型  $c_\phi: V \longrightarrow V$  は  $\mathfrak{g}$ -加群の同型であり,  $c_\phi^{-1}(v) \in V$  が所望のベクトルとなる.

**case2:  $\phi$  が忠実とは限らない既約表現の場合**

(2.3.2) を充たす任意の  $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, V)$  を 1 つとる. このとき  $\forall [x, y] \in [\text{Ker } \phi, \text{Ker } \phi]$  に対して

$$f([x, y]) = \phi(x) \circ f(y) - \phi(y) \circ f(x) = 0 \iff [x, y] \in \text{Ker } f$$

が言えるが, 仮定より  $\mathfrak{g}$  は半単純なので, 系 2.2.3-(3) よりそのイデアルである  $\text{Ker } \phi \subset \mathfrak{g}$  もまた半単純. 故に系 2.2.3-(1) から  $[\text{Ker } \phi, \text{Ker } \phi] = \text{Ker } \phi$  であり,

$$\text{Ker } \phi \subset \text{Ker } f$$

がわかった。従ってこのとき商ベクトル空間の普遍性を使うことができ、以下の図式を可換にする  $\bar{f} \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V/\text{Ker } \phi, \mathfrak{g})$  が一意に存在する：

$$\begin{array}{ccc} \mathfrak{g} & \xrightarrow{f} & V \\ p \downarrow & \nearrow \exists! \bar{f} & \\ \mathfrak{g}/\text{Ker } \phi & & \end{array}$$

さらに商代数の普遍性から、表現  $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$  は以下の図式を可換にする表現  $\bar{\phi}: \mathfrak{g}/\text{Ker } \phi \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$  に一意に持ち上がる：

$$\begin{array}{ccc} \mathfrak{g} & \xrightarrow{\phi} & \mathfrak{gl}(V) \\ p \downarrow & \nearrow \exists! \bar{\phi} & \\ \mathfrak{g}/\text{Ker } \phi & & \end{array}$$

このとき  $\bar{\phi}$  は  $\mathfrak{g}/\text{Ker } \phi$  の忠実な既約表現であり、 $\bar{f} \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}/\text{Ker } \phi, V)$  は (2.3.2) を満たす。よって **case1** からある  $v \in V$  があって

$$\forall x \in \mathfrak{g}, \bar{f}(x + \text{Ker } \phi) = \bar{\phi}(x + \text{Ker } \phi)(v) \iff \forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = \phi(x)(v)$$

が成り立つ。

### case3: $\phi$ が一般の場合

(2.3.2) を満たす任意の  $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, V)$  を 1 つ固定する。このときある  $v \in V$  が存在して  $\forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = \phi(x)(v)$  が成り立つことを  $\dim V$  に関する数学的帰納法により示す。  $\dim V = 1$  のとき、補題 2.3.5 より  $\phi$  が零写像なので  $\forall v \in V$  に対して  $\forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = \phi(x)(v)$  が成り立つ。

$\dim V > 0$  とする。  $\mathfrak{g}$ -加群  $V$  が既約でないならば、部分  $\mathfrak{g}$ -加群  $0 \subsetneq W \subsetneq V$  が存在する。標準的射影\*6  $p: V \rightarrow V/W$  および  $\forall x \in \mathfrak{g}$  について  $W \subset \text{Ker } p \circ \phi(x)$  であるから、商代数の普遍性より  $\forall \phi(x) \in \phi(\mathfrak{g})$  に対して以下の図式を可換にする  $\bar{\phi}(x) \in \mathfrak{gl}(V/W)$  が一意に存在する：

$$\begin{array}{ccc} V & \xrightarrow{p \circ \phi(x)} & V/W \\ p \downarrow & \nearrow \exists! \bar{\phi}(x) & \\ V/W & & \end{array}$$

このとき写像

$$\phi_1: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V/W), x \mapsto (v + W \mapsto \bar{\phi}(x)(v + W))$$

は well-defined な Lie 代数の準同型なので  $\mathfrak{g}$  の表現である。  $f_1 := p \circ f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, V/W)$  は  $\phi_1$  に関して (2.3.2) を満たすので、帰納法の仮定より\*7 ある  $v_1 + W \in V/W$  が存在して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f_1(x) = f(x) + W = \phi_1(x)(v_1 + W)$$

\*6 このとき  $V$  の  $\mathbb{K}$ -ベクトル空間としての構造しか見ない。

\*7  $\dim V/W < \dim V$  なので帰納法の仮定が使える。

が成り立つ。ここで  $f_2 \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, W)$  を

$$f_2(x) := f(x) - \phi(x)(v_1)$$

と定義すると,  $f_2$  は部分表現  $\phi|_W: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(W)$  に関して (2.3.2) を満たす。よって帰納法の仮定から\*8ある  $v_2 \in V$  が存在して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f_2(x) = \phi|_W(x)(v_2)$$

が成り立つ。以上より,  $v := v_1 + v_2 \in V$  とおけば

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = f_2(x) + \phi(x)(v_1) = \phi|_W(x)(v_2) + \phi(x)(v_1) = \phi(x)(v)$$

が言えた。 ■

### 定理 2.3.3: 完全可約性に関する Weyl の定理

$\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$  が半単純 Lie 代数の有限次元表現ならば,  $\phi$  は完全可約である。

**証明**  $V$  の任意の部分  $\mathfrak{g}$ -加群  $W \subset V$  を 1 つ固定する。このとき命題 2.3.1 より, 部分  $\mathfrak{g}$ -加群  $W^c \subset V$  が存在して  $V \cong W \oplus W^c$  が成り立つことを示せば良い。

$\text{End } V$  の部分ベクトル空間  $L_W$  を

$$L_W := \{ t \in \text{End } V \mid t(V) \subset W, t(W) = 0 \}$$

と定める。  $L_W$  への  $\mathfrak{g}$  の左作用を

$$x \blacktriangleright t := [\phi(x), t]$$

と定義すると,  $W$  が部分  $\mathfrak{g}$ -加群であることおよび定義 2.3.7 より  $L_W$  は  $\mathfrak{g}$ -加群になる。 i.e.

$$\tilde{\phi}: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(L_W), x \mapsto (t \mapsto x \blacktriangleright t)$$

は半単純 Lie 代数  $\mathfrak{g}$  の有限次元表現である。

ここで  $\mathbb{K}$ -ベクトル空間  $W$  への射影演算子\*9  $p: V \rightarrow V$  を 1 つとり,  $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, L_W)$  を

$$f(x) := [p, \phi(x)]$$

と定義しよう。このとき  $\forall x, y \in \mathfrak{g}$  に対して Jacobi 恒等式から

$$\begin{aligned} f([x, y]) &= [p, [\phi(x), \phi(y)]] \\ &= [\phi(x), [p, \phi(y)]] - [\phi(y), [p, \phi(x)]] \\ &= [\phi(x), f(y)] - [\phi(y), f(x)] \\ &= \tilde{\phi}(x) \circ f(y) - \tilde{\phi}(y) \circ f(x) \end{aligned}$$

\*8  $\dim W < \dim V$  なので帰納法の仮定が使える。

\*9  $p^2 = p$  かつ  $p|_W = \text{id}_W$

が成り立つので、補題 2.3.6 からある  $t \in L_W$  が存在して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = \tilde{\phi}(x)(t) = [\phi(x), t]$$

が成り立つ。よってこのとき  $\forall x \in \mathfrak{g}$  に対して

$$[\phi(x), p+t] = \tilde{\phi}(\phi(x))(p+t) = -[p, \phi(x)] + [\phi(x), t] = -f(x) + [\phi(x), t] = 0$$

が言えた。i.e.  $p+t \in \text{End } V$  は  $\mathfrak{g}$ -加群の準同型である。さらに  $t \in L_W$  であることから、 $(p+t)(V) = W$  かつ  $(p+t) \circ (p+t)|_W = \text{id}_W$  が言える。i.e.  $\mathfrak{g}$ -加群の短完全列

$$0 \hookrightarrow \text{Ker}(p+t) \hookrightarrow V \xrightarrow{p+t} W \longrightarrow 0$$

は分裂し、 $\mathfrak{g}$ -加群の直和として

$$V \cong W \oplus \text{Ker}(p+t)$$

が言えた。 ■

### 2.3.6 Jordan 分解の保存

---

## 2.4 $\mathfrak{sl}(2, \mathbb{K})$ の表現

---

### 2.4.1 ウェイトと極大ベクトル

---

### 2.4.2 既約加群の分類

---

## 2.5 ルート空間分解

---

### 2.5.1 極大トーラスとルート

---

### 2.5.2 極大トーラスの中心化代数

---

### 2.5.3 直交性

---

### 2.5.4 整性

---

### 2.5.5 有理性

---